

§ 8 意志の自由

参考文献：

コニー&サイダー『形而上学レッスン』小山虎訳、春秋社、「第六章、自由意志と決定論」
ジョン・サール『心・脳・科学』土屋俊訳、岩波書店

「意志は自由であるのか因果的に決定されているのか」という問いに対する答えは、3つに別れる。まず非両立論と両立論に別れる。つぎに非両立論が、決定論と自由意志論に別れる

1、非両立論 (Incompatibilism)：決定論と自由は両立しない

(1) 強い決定論(hard determinism):自由意志を認めない。

因果的決定論「すべての出来事には原因がある」

古典的決定論者：ドルバック(1723-1789)

(これ以外に「論理的決定論」という主張もある。これについては来週検討)

<自由意志批判>

・私たちが決定論を信じる理由は、科学が成功しているからである。「科学は、最終的にはすべての原因を発見する」と思われる。

・量子力学も確率的な法則性はみとめるので、自然現象が全く無法則であると考えたのではない。「決定論の理解を伝えるためのもっとも強力なイメージは、現代においても、かつてラプラスが表現した形に頼らざるを得ないように思われます。それは、「ある一人の理想的観察者がある瞬間におけるすべての粒子の位置を知り、また、その粒子の運動を支配する法則もまたすべて知っていたならば、この宇宙の将来と過去にわたる全歴史を推定できる」というものです。現代の量子力学を知るラプラス的科学家が、その理想的観察者に行わせる予言のいくつかは、統計的なものになるかもしれません。しかし、その場合でも意志が自由であるという余地は許容されません。」(サール、前掲書、p.132)

<両立論批判>

・もし原因のない出来事があるとすると、その出来事はそれだけで終らず、それが原因となって別の出来事を引き起こすだろう。その因果関係が法則的であるとしても、その因果の系列は、他の因果の系列を攪乱するのではないだろうか。

・例えば、脳内の出来事は自然法則に従っている。しかし、意志の働きと同一の脳内の出来事(同一性説)、あるいはそれと一対一対応する脳内の出来事(随伴現象説)は、もし意志が自由であるならば、原因のない出来事でなければならない。脳内の出来事の中に、原因を持たない出来事がある、ということは、エネルギー保存の法則に矛盾するのではないか。原因がないのにある出来事が生じるとすれば、そのためのエネルギーが無から生まれたことになるからである。

(2) 自由意志論(libertarianism、metaphysical libertarianism)：決定論を認めない

「世界には自由な行為(原因のない出来事)がある」

現代の自由意志論者：ヴァン・インワーゲン、ロバート・ケイン

<強い決定論批判>

・「もし強い決定論を信じていると主張する人がいるのなら、その人を試す簡単な実験がある。彼の顔を殴るのだ。それもおもいっきり。そうしてから、あなたを責めないように説得してみるのだ。だって、彼によれば、結局あなたには彼を殴るしかなかったのだから。前もって言うておくが、自分が説いて回っていることを実践するよう彼を説得するのはとても大変だということがわかるだろう。」(サイダー、前掲書、172)

・素粒子の振る舞いが統計的には法則に従っているとしても、個々の素粒子の振る舞いは不決定である。したがって、その振る舞いによって右手を上げるか、左手を上げるかを決めて、その通りにするということができるのだとすると、手を上げる行為は、物理的に決定していないことになる。それによって、Aさんと結婚するかしないかを決めるのだとすると、その人の人生は、物理的に決定していないことになる。(注1)

(これは強い決定論への批判とはなっても、意志自由論の主張にはならない。)

①二元論の立場での自由意志論：「意識や選択の源である魂は、非物質的なものなので自然法則に従わない」(サイダー、前掲書、173)

②一元論の立場での自由意志論：「人間は純粋な物理的システムなのだが、他の物理的システムが従う自然法則に従わない」(173)

<自由意志論での意志の自由の定義の難しさ>

・自由とは単に原因がないことだろうか？ しかし、それはでたらめな行為でしかないだろう。

・自由な行為とは、その人の本質(魂、本性、その人らしさ)に従う行為だろうか？ しかしその本質が与えられたものであるとすると、それは自由な行為であるとは言えないだろう。

・サールによる自由意志の理解

「知覚の場合には、「これは私に起こっているなにごとかだ」という感じがあるのに対して、行為の場合には「私がこのことを起こしているのだ」という感じがあるわけです。しかし「私がこのことを起こしているのだ」という感じには、「いまなにか別のことをしていてもよいはずだ」という感じが伴います。[……] 私が提案したことは、これこそが我々が自由意志をもつという確信の源泉なのだという事です」(サール、前掲書、145)

「もししようとしたならば、別の行為をすることもできた」という「他行為可能性」(the ability to act others)が、自由な行為にとって重要な条件である。

「もししようとしたならば、別の行為をすることもできた」という文は、反事実的条件法である。この文を経験によって検証することは不可能である。つまり、意志の自由を経験で検証することはできない。

「因果関係」を理解(説明)するためにも「意志の自由」を理解(説明)するためにも、反事実的条件法が必要である。

2、両立論(Compatibilism)=弱い決定論

古典的両立論者、ホップズ、ヒューム、ジェームズ（「弱い決定論」）
現代の両立論者、フランクファート、デネット

■両立論における自由な行為の定義（サイダーの試み）

両立論は、決定論を認めるので、意志決定が自由であるとは、それが原因を持たないということではない。

定義1 「自由な行為とは、適切な方法で引き起こされた行為のことである」 185

ピストルで脅迫されて、他の人を殺したとしても、それは適切な方法でひきおこされたのではない。適切な方法とはなにか？

定義2 「自由な行為とは、行為者の信念と欲求によって引き起こされた行為のことである」

もしある人を毒殺したいと欲望するように催眠術をかけられていたときには、その行為は自由な行為ではない。ゆえに、信念と欲求によって惹き起こされるだけでは不十分だ。

定義3 「自由な行為とは行為者の信念と欲求によって引き起こされた行為のことである。

ただし、行為者がその信念と欲求を自由に選んでいたのだからなければならない」

この定義は、「自由に選ぶ」ことを前提しており、循環している。

定義4 「自由な行為とは行為者の信念と欲求によって引き起こされた行為のことである。

ただし、行為者が他のひとによってその信念と欲求をもつよう強いられているのではない。」 188

反論：「もし「強えられる」が「引き起こされる」を意味するのなら、この定義によれば、これまで人間がしてきたことの中に自由な行為は何一つなかったことになる。」

定義7 「自由な行為とは行為者の信念と欲求によって引き起こされた行為のことである。

ただし、その信念と欲求は「自分自身」から来たものでなければならない。」

「自分自身から」の説明の試み：「あなたの一階の欲求があなたの二階の欲求によって引き起こされたのであれば、その一階の欲求はあなたの「自分自身」から来たことになる。」

反論：催眠術を掛けられて行為して、その行為の理由を説明する場合。

【意志の自由についての補足】

注1、量子論サイコロについて

自由の証明：＜電子がどちらのスリットを通り抜けるかは、物理的に決定していない。しかし、一方のスリットを通れば、右手を挙げて、他方のスリットを通ると左手を挙げることを決めて、それに従うことができる。そのことは、我々の行為が、物理的に決定していないことの証明になる。＞

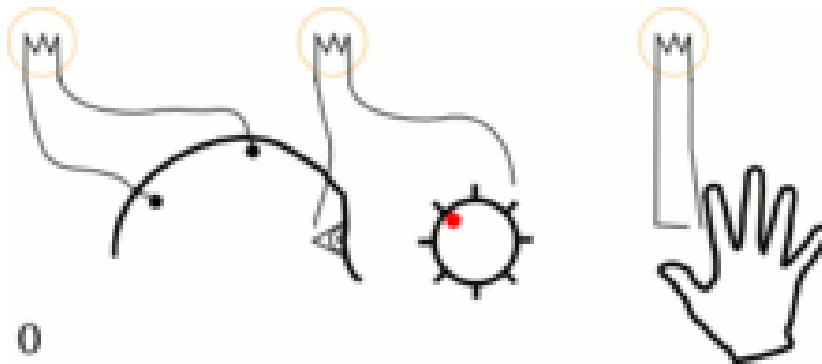
反論：上記のケースで、一方のスリットを通れば、右手を挙げ、他方のスリットを通ると左手を挙げるロボットを作ることができる。このとき、このロボットの動作は、物理的に決定していないことになるのだろうか。

注2、自由への批判：Libet（1916～2007）の実験

・ Libet, B., Gleason, C. A., Wright, E. W., and Pearl, D. K. (1983). Time of conscious intention to act in relation to onset of cerebral activity (readiness-potential). The unconscious initiation of a freely voluntary act. *Brain*, **106**:623-642.

・ベンジャミン・リベット 『マインド・タイム 脳と意識の時間』 [下條信輔](#) 訳、岩波書店、2005年。

Hi



☞

Libet's experiment:

0 repose

1 (-500 ms) EEG measures Readiness potential

2 (-200 ms) Person notes the position of the dot when decides

3 (0 ms) Act

被験者は、机にすわって、オシロスコープの時計を見る。彼の頭の運動皮質(motor cortex)に電極がつけられている。被験者は、時計を見ながら、自由にボタンを押すことができる。実験は何回でもすることができるが、被験者は、ボタンを押そうと思ったときの時計の針の位置を覚えておかなければならない。実際にボタンを押した時間は、自動的に図られる。するとボタンを押そうと思ってから、実際にボタンを押すまで200ミリ秒かかる。しかし、ボタンを押すよりも500ミリ秒前に脳の運動皮質につけられた電極は反応する。つまり、被験者がボタンを押そうと意図するよりも300ミリ秒まえに運動皮質が活性化している。行為の意識的な決定には、脳内での電荷の無意識的な蓄積が先行している。この蓄積は、準備電位 ([readiness potential](#)) と呼ばれる。